

# 「これから技術者になる君へ 心得120」

西畑三樹男 著

著者は戦前の工業学校で学び、その後大学や企業での研究活動を経て、現在は企業経営の傍ら、大学で教鞭を取られたり、大学生の研究のために企業内の研究設備を解放されたりと、今も若き技術者の育成にご尽力されている企業経営者である。

本書は、氏の豊富な経験の中から、これから技術者を目指そうとしている若者たちに、立派な技術者になるためには、どのような事に心掛けなければならないかを、さまざまな視点から12章120の項目に起こしてわかりやすく説いたものである。

著者は、あとがきの中で、「戦後の日本人、とりわけ技術者は強かった。ハングリー精神のもと、欧米の技術に追いつけ追い越せを合い言葉に一人の落伍者もなく頑張り続けた。その結果、世界に冠たる技術大国を築きあげたのである。時を経て21世紀の技術はどうなるのであろうか。これからの技術社会においては、新しいものの取り入れ方、従来技術の改善改良、異種産業との交流などが、ますます重要であり、これには柔軟な頭脳の持ち主である若い人の力が不可欠である。どうか、無限の知恵を発揮して世界中で通用する技術者になってほしい」と述べている。

このような著者の熱き思いが120の項目の随所に饅められているが、そのなかから筆者が心に留めたいいくつかを、行数の許す限りご紹介したいと思う。

・「これからは知恵と若さが技術を創る」

創造し、開発する能力に優れている技術者は「知恵」を身に付けている。知恵とは、問題を正しく認識し、さまざまな条件を考慮し

たうえで何かを判断する能力のことである。

知恵は年齢を重ねながら経験を積むことにより、身に付くものであるが、若いうちに良き指導者を得ることによって効率的に得ることができる。

・「良き指導者を求めよ」

技術者が自分なりの新しい道を開いていこうとするとき、まず必要となるのが従来の技術に対する知識であり経験である。それを教えてくれるのが指導者である。「流れに入り、流れより出でて、己が道」と言う言葉がある。

学校で、電気や機械、金属などの工学の基礎を学び、社会に出て従来の手法を完全にマスターする。その先に自分なりの工夫を加えた新しい技術が見えてくる。

・「匠の技は技術立国の元」

細かな点まで行き届く繊細な神経と美的感覚、手先の器用さなど、代々引き継がれてきた匠の技は、技術立国の土台である。

21世紀に求められる新しい技術を考えるとき、日本に培われてきた匠の技を知り、それを先端技術と組み合わせることが重要であり、若い技術者にそのことを望みたい。

・「体で覚えた技術は忘れない」

最近では簡単にコンピュータから情報を得ることができる反面、そのときだけ理解し、頭の中からすぐに消えてしまうということになりやすい。どんな技術でも、目で見て手で触って音で感じてという五感を通して覚えていくことが大切である。

・「技術の習得は10代20代」

技術者としての円熟期は30～40代である。その年代に日本の経済発展の中核となる技術者となるためには、10代から20代前半における不断的な努力が不可欠である。

(日刊工業新聞社 158頁 1835円) (梅田政勝)